

紀 要

第 8 号

目 次

序

- 近江へのアプローチ・その2 神崎郡篇…………… (近江歴史クラブ)
1. 愛知川左岸域の開発と水利…………… (佐野 静代)
 2. 後期古墳…………… (細川 修平)
 3. 丸山1号墳出土土師質陶棺について…………… (中村 智孝)
 4. 古墳時代の鍛冶工房…………… (大道 和人)
 5. 古代の集落…………… (畑中 英二)
 6. 建物遺構…………… (神保 忠宏)
 7. 古代寺院—軒丸瓦の文様から—…………… (重岡 卓)
 8. 郷 (里)…………… (内田 保之)
- まとめにかえて……………
- 日本古代国家形成史論に関する諸前提
- 研究ノートあるいは覚書その1—…………… (芝池 信幸)
- 春日山古墳群分布調査報告… (岩橋隆浩・大崎康文・工藤基志・高橋あかね)
- 6世紀代における木棺直葬墳の副葬・供献について
- 葬送習俗としての「主体部内容器埋納」にみる
「畿内型横穴式石室」との関係を中心に—…………… (畑中 英二)
- 高島郡における製鉄の問題から—6世紀を考えるための序章— (細川 修平)
- 湖南地域の異方位地割と古代の建物方位…………… (田井中洋介)
- 木炭窯の形態からみた古代鉄生産の系譜と展開に関する予察
- 滋賀県瀬田丘陵の事例を中心に—…………… (大道 和人)
- 赤野井湾遺跡出土の鋤…………… (阿刀 弘史)
-

1995. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

6世紀代における木棺直葬墳の副葬・供献について

—葬送習俗としての「主体部内容器埋納」にみる「畿内型横穴式石室」との関係を中心に—

畑 中 英 二

1. はじめに

古墳時代の葬送墓制は6世紀以降の畿内型横穴式石室¹¹⁾の導入によって、横穴式石室と石室内への容器副葬が行われるようになり、埋葬主体部の変化のみならず副葬、或いは、供献のあり方、つまり葬送儀礼の変化をもたらしたという。結果として従来の他界観、強いては世界観の変化をも引き起こしたと考えられている。

滋賀県下においては正確な集成に基づくものではないが、6世紀代以降の横穴式石室には基本的に主体部内容器埋納が行われているといえる。一方、6世紀代以降の滋賀県下におけるマイノリティーの非横穴式石室墓制としての木棺直葬墳にはこういった習俗がどの様に反映しているのであろうか。この様相を明らかにすることは非横穴式石室における畿内型横穴式石室の習俗の部分での関わり方を示唆するものであると考えるのである。

この状況の把握を行うべく5世紀から7世紀にかけての滋賀県下を中心とした木棺直葬墳における供献・副葬の流れの整理を試み、加えて若干の他地域の事例を挙げて比較の対象とし、それに派生する問題についてふれてみたい。

2. 滋賀県下における木棺直葬墳の副葬・供献の流れ

—「主体部内容器埋納」の有無を中心に—

ここでは5世紀後半から7世紀にかけての木棺直葬墳における副葬・供献の流れを整理すべく大きく3段階に分けて時期毎にふれてみたい。

(1) 5世紀後半以降6世紀初頭

5世紀末から6世紀初頭と考えられる資料として守山市服部遺跡と浅井町雲雀山古墳群のものが挙げられる。

a : 守山市服部遺跡¹²⁾ (第1図)

5世紀末頃から6世紀初頭にかけてに位置づけられる資料として服部遺跡の埋没古墳とそれに伴う副葬・供献についてふれてみたい。服部遺跡では27基の古墳関係の遺構が検出されている。何れも後世の削平もあって埋葬主体部は検出されなかったが、幾つかの周溝内で明確な供献が確認されている。また、逆に、遺物の出土状況から埋葬主体部に副葬され、それが墳丘及び埋葬主体部の削平とともに周溝内に落ち込んだようなものはみられないことから、何れの古墳においても土器の主体部内埋納は基本的には見られないとしておきたい。加えて、墳丘が削平されているにも関わらず石材の出土を見ないことから横穴式石室は導入されていないととらえるべきで、埋葬主体部はおそらくは木棺直葬系であったと想定できる。

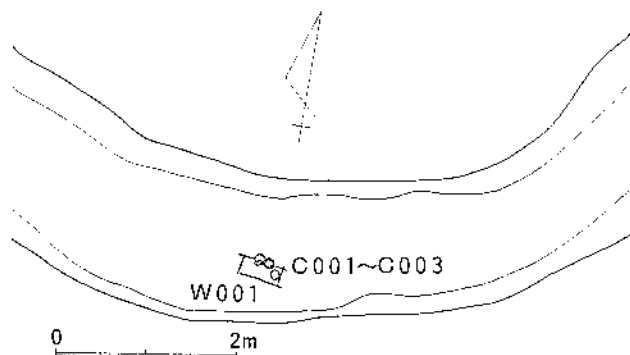
明確な供献形態をとっているにないに関わらず、また遺構の遺存状況についても不問とし、須恵器・土師器からなる土器の出土率を見ると、27基の古墳関係遺構の内20基で確認され、74%で土器がみられることとなる。加えてその中で、供膳形態をとるもの（杯類など）は15基で確認され、出土率は75%であり、古墳関連遺構の全体の中で54、5%でみられるといえる。

また、供献される土器に関しても土師器のみと須恵器のみと両者を使用する3つのグループが存在する。土師器のみの供献を行うものについては杯と壺のセットが3例、壺のみのセットが1例みられる。また、土師器と須恵器の両者を用いて供献する場合に用いられる土師器は壺のみのもの4例で占められる。つまり、ここでは供献にあたって何れも供膳形態が必要とされているとみられるのである。供膳形態の食器を土師器か或いは須恵器を用いるかについては、時期差、内的要因の何れかであろうと考えられるのだが、遺構の配置から須恵器と土師器の供献を行う古墳に後出するものが土師器のみの供献を行っていることから、供献における土師器、須恵器の選択は土師器から須恵器という時期差ではなく内的要因であったと考えるのが妥当である。加えて、土師器のみを供献する古墳は何れも方墳であることも集団内部で規定された要因でもって供献の形態も対応している可能性がある。

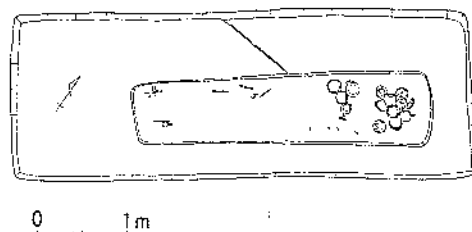
时期的には北部九州などでは主体部内に食器を副葬する習俗が定着を見せ始めるところであるが、滋賀県下においては未だ木棺直葬を中心とした埋葬方法をとり、容器は主体部内に副葬されるというより主体部から離れたところで供献されるべきものとして取り扱われているといえる。

b：浅井町雲雀山古墳群⁽³⁾

5世紀末から6世紀初頭にかけての資料として浅井町雲雀山古墳群の資料を挙げる事が出来



第1図 守山市 服部遺跡



第2図 彦根市 葛籠北古墳群

る。大阪市立大学文学部歴史学教室によって3基の古墳の調査が行われた。何れも墳丘の遺存状態は比較的良好で、それぞれに1基の埋葬主体部が検出されている。何れも埋葬主体部の床面からは容器は検出されず、淨いた状態で、或いは墳丘上で人為的に壊された状態で出土している。葬送に関わる儀礼の後半段階の中で容器が用いられたと考えられる。

(2) 6世紀

6世紀代の資料として、今津町王塚古墳群、今津町妙見山古墳群、今津町高田館古墳群、彦根市葛籠北古墳群が挙げられる。これらの内明らかに6世紀前半代に属するものは見あたらず、何れも概ね6世紀半ばから6世紀後半におさまるものである。

a：今津町王塚古墳群⁽⁴⁾

6世紀半ばから後半にかけての資料として王塚古墳群の資料を挙げることが出来る。現在までに今津町教育委員会の調査によって9基（報告されているもの）、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会の調査によって8基の埋没古墳が検出されている。何れも後世の削平によって墳丘は存在しないが、埋葬主体部については内8基について検出されている。これらは何れも木棺直葬を埋葬主体部とするものである。また、一墳丘一埋葬が基本的といえる。

これらの内埋葬主体部の遺存状態の良好なものに関すると、何れも副葬品としての土器の存在が確認できる。一方、周溝内には明確な供献は見られない。

副葬された土器類、中でも土師器については供膳形態をとるもの、或いは、壺はみられず、甕がみられるのみである。

b：今津町妙見山古墳群⁽⁵⁾（第4図）

6世紀後半から末にかけての資料として妙見山古墳群の資料を挙げることが出来る。現在までに今津町教育委員会と滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会によって数次の調査が行われているが、6世紀代にあたるものについては1基のみが調査されている。調査が行われたE-1号墳は墳丘の遺存状態も良好で埋葬主体部に関しても良好に遺存していた。この事例は一墳丘一埋葬である。

供献に関すると、墳丘上、周溝内に明確なものはみられなかった。一方、埋葬主体部内には土器の埋納が確認できた。土師器については確認されなかった。また、棺内と棺外に土器が分けて置かれていることも確認される。

c：今津町高田館古墳群⁽⁶⁾

6世紀後半代の資料として高田館古墳群の資料を挙げることが出来る。現在までに滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会によって調査が行われ3基の埋没円墳が検出されている。何れも墳丘は後世の削平によって存在しないが、埋葬主体部については1基のみ良好に遺存している。これらは木棺直葬を埋葬主体部にすると考えられる。この事例は一墳丘一埋葬である。

供献に関すると、周溝内で数個体の須恵器甕が破碎されたような状態で出土していることが確認される。主体部内埋納に関しては20点の土器（須恵器）と鉄鏃、刀子が出土している。土師器に関しては1点も出土していない。

d : 彦根市葛籠北古墳群 (第2図)

6世紀後半の事例として、葛籠北遺跡の資料を挙げる事が出来る。現在までに彦根市教育委員会によって調査が行われ、8基の円墳と5基の土塋墓が検出されている。何れも墳丘は後世の削平によって存在しないが、埋葬主体部に関しては1基のみ良好に遺存している。これらは木棺直葬を埋葬主体部としているものであると考えられる。この事例は一墳丘一埋葬である。

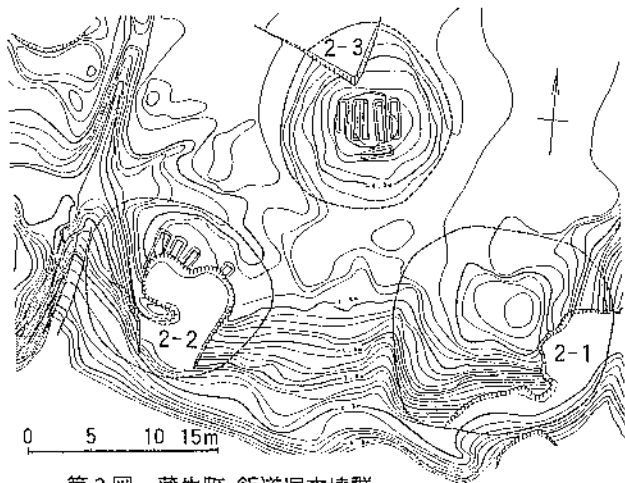
周溝内の供献は確認されないが、主体部内埋納に関しては11点の須恵器があり、その他には、鉄刀、鉄鏃、鉄鎌が出土している。土師器に関しては出土していない。

(3) 7世紀

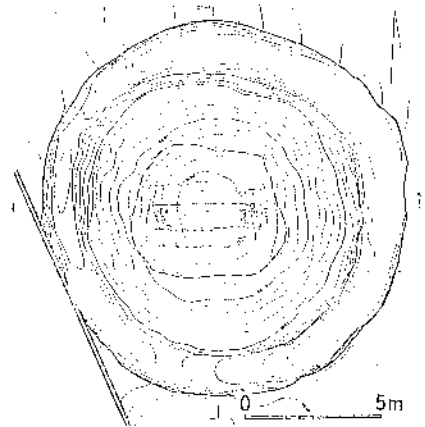
7世紀代の資料として、日野町小御門古墳群、蒲生町飯道塚古墳群が挙げられる。

a : 日野町小御門古墳群¹⁸⁾

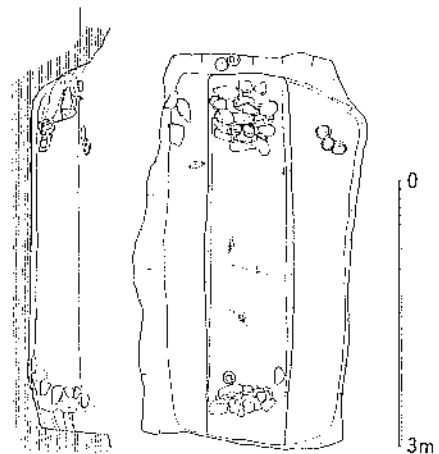
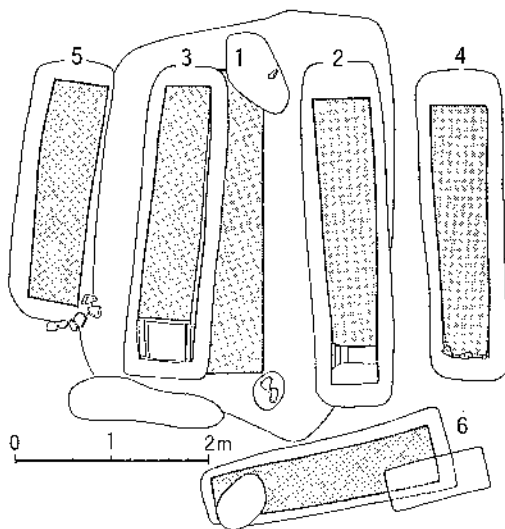
7世紀初頭の遺物が出土しているとされることから当該期の資料として日野町小御門古墳群の



第3図 蒲生町 飯道塚古墳群



第4図 今津町 妙見山古墳群



資料を挙げる事が出来る。滋賀県教育委員会によって10基の内2基の調査が行われている。墳丘の遺存状態は必ずしも良好ではないが、主体部については何れも残存している。主体部はⅡ-3号墳においては切り合いながら6基の木棺が直葬されている。Ⅱ-2号墳においては4基の木棺直葬と1基の火化施設が切り合いながら存在する。遺物の出土状態としてはⅡ-2号墳においては出土せず、Ⅱ-3号墳においては墳丘上にて7世紀初頭と考えられる杯が出土しているほかには、遺物の出土はない。

b：蒲生町飯道塚古墳群⁽⁹⁾（第3図）

7世紀初頭（荒坂期前半）の資料として蒲生町飯道塚古墳群の資料を挙げる事が出来る。滋賀県教育委員会によって10基の内2基の調査が行われている。墳丘の遺存状態は必ずしも良好ではないが、主体部については遺存している。主体部は6号墳は4基の木棺が若干切り合いながら、8号墳では5基の木棺が位置をずらしながら直葬されている。

供献に關すると、8号墳1・2号遺構の掘り方に須恵器長頸壺が検出されている。主体部内副葬に關しては6号墳1号遺構内にみられる須恵器高杯・甕が1点ずつ出土している。

(4) 滋賀県下の状況の把握

滋賀県下の資料を以上にふれてみたが、資料数が必ずしも多くないことが考察の妥当性を欠くかもしれない。その点を恐れずに概ねの傾向について述べることにしたい。5世紀代（中でも後半代）の資料として挙げたのが守山市服部遺跡、浅井町雲雀山古墳群であるが、何れも主体部内容器埋納は行ってないようである。逆に周溝内や墳丘上において供献儀礼が行われたと推測させる出土状況を呈する容器が出土している。

一方、6世紀代（6世紀前半代に資料が欠落しているので、6世紀中葉以降と限定しておく）において、横穴式石室墳が盛んに作られる頃に対応する木棺直葬墳として高島郡中部地域（今津町高田館・妙見山・王塚古墳群）と彦根市葛籠古墳群を挙げたが、遺存状態の良好な古墳からは何れも主体部内容器埋納を行っていることが確認された。更に一墳丘一埋葬を行うというのが傾向として見いだされた。

7世紀代の資料として挙げたのが蒲生郡東部の日野町小御門古墳群、蒲生町飯道塚古墳群であるが、前述の6世紀代のものとは異なり主体部内に容器の埋納がみられない。また、一墳丘に複数の埋葬施設を持つことも差異として見受けられる。

6世紀代以降の木棺直葬墳の分布はかなり限定的で高島郡中部である今津町と彦根市に見受けられる（彦根市葛籠古墳群の事例は埋没古墳であるために、周辺に未発見の事例が存在する可能性がある）。また、7世紀代においても一墳丘に複数埋葬施設を持つ木棺直葬墳は蒲生郡東部にしか見られないために周辺地域とはかなり異なる様相を持っていると理解することが出来るだろう。

3. 他地域での傾向

前項までに滋賀県下での事例を挙げたが、比較の対象としてその他の地域での事例を若干挙げて検討の材料としたい。

(1) 横穴式石室の導入と主体部内容器埋納について

木棺直葬墳にみる容器埋納の動向をうかがうべく、横穴式石室における容器埋納の動向について北部九州と河内での事例にふれてみたい。

まず、重藤輝行氏の研究¹¹⁰に従って北部九州での初期横穴式石室と主体部内に土器を埋納する古墳の展開についてふれてみたい。

北部九州においては横穴式石室の出現は4世紀と5世紀の境を前後する時期に求められる。ただ、埋葬主体部に食器類を埋納するのはこれよりもっと後であり、当該期には、老司古墳や鋤崎古墳等にみられるように前代の墳頂での儀礼に対応して墓道などを改変していることと、石室内に土器などの容器を埋納することは希であることから埋葬施設のみが取り入れられたと考えられている。TK47型式頃までは、横穴式石室と土師器・須恵器などの容器の主体部内埋納は必ずしも一致せず、一部の地域、或いは階層のみで導入されたと考えられている。これらは朝鮮半島での習俗であると考えてられており、被葬者は渡来系の人々であると想定されている。一方、MT15型式以降横穴式石室の主体部内に容器を埋納する古墳はほぼ北部九州全域に広がるとみられている。加えて、前段階までに埋納されていた土器は壺類が中心的に選択されていたのに対し、当該階以降は杯蓋、高杯等を選択する例が増加し変化がみられるという。ここでも畿内系横穴式石室の導入とそれに伴う葬送儀礼の変化が見受けられるという指摘もある¹¹¹。

次いで、河内の横穴式石室導入期の様相についてふれてみたい。河内の横穴式石室導入期のものについては現在5基が知られている。石室構造は畿内型A類に高井田山・郡川西塚古墳、肥後型に塔塚・芝山古墳、北部九州型に藤の森古墳がその系譜が認められるといわれている¹¹²。また、年代的には、藤の森・塔塚古墳が5世紀中～後半、高井田山・郡川西塚古墳・長原七ノ坪がTK23～47型式、芝山古墳がMT15型式に比定されている。これらの中で、主体部内容器埋納についてみてみたい。これらの内で主体部内容器埋納を行わないのは藤の森古墳、塔塚古墳のみである。年代的にもその他の古墳に比べて一段階古いと考えられているもので、横穴式石室のみの導入であったと考えられている。高井田古墳・郡川西塚古墳の石室は何れも百濟系であり、火埴斗などの副葬品からも同様のことが指摘できる。

MT15型式には市尾墓山古墳で畿内型横穴式石室の導入がみられ、大型前方後円墳への採用が行われたとし重要視されているところである¹¹³。河内の周辺地域でも当該期には横穴式石室墳からなる大型群集墳の形成が開始されており、同時に主体部内容器埋納の習俗も定着しているようである。

(2) 木棺直葬墳にみる主体部内容器副葬について

近江での状況との比較の対象とすべく、南山城、丹後地域の木棺直葬墳にみる主体部内容器副葬の事例についてふれてみたい。

南山城地域においては6世紀代に久世地域のみが横穴式石室不採用の地域であることが確認されている¹¹⁴。その中にはMT15型式の前方後円墳である坊主山1号墳、TK10型式前後の長池古墳が含まれ、また、TK10型式前後の円墳である恵美塚古墳、TK43型式前後の円墳である東垣内古墳が知られている。発掘調査によってその存在が明らかとなったものとしては芝山

古墳群が挙げられる。何れも地下に埋没し墳丘は削平されているが、埋葬主体部の明らかなものも存在する。¹⁵⁾

この中で、調査の行われた前方後円墳である長池古墳については3基の本棺直葬による埋葬主体部が確認されており、その何れからも須恵器・土師器からなる土器類の埋納が確認されている。¹⁶⁾ 地域の首長墓の動向にあわせるかのように、小古墳においても横穴式石室の導入はみられない。その事例として芝山古墳群についてふれてみたい。検出された主体部の様相から何れも一墳丘一埋葬であると考えられる。

次いで、丹後の様相については、竹野川流域を中心に石崎善久氏による集成、研究が行われていることから基本的にはそれに従いたい。¹⁷⁾ ここではTK208型式からTK209型式に到るまで6段階に時期区分が行われている。それによると、TK208型式を初現に古墳祭祀の中に須恵器が見られるようになるという。また、それは器種構成、埋納の方法等に共通性が見られることからある程度定型化した形で古墳祭祀に導入されたものであると考えられている。また、MT15型式まで棺内或いは墓坑内(棺上)には須恵器、土師器などの食器類は納められていないのであるが、この段階以降そういった例が増加する。一つの特徴としては土器枕として須恵器を用いている例が棺内遺物の大半であり山陰地方特有の一つの地域性を表していると考えられている。加えて、この段階から一墳丘複数埋葬が普遍化する傾向がみられる。また、古墳祭祀において土師器と須恵器の使い分けがみられるようで、MT15型式以降は現時点では供献・副葬に土師器は用いられていないことが確認できる。

4. 若干の考察

—派生した問題と今後の課題—

(1) 「畿内型横穴式石室」と容器埋納の問題

—葬送にかかる習俗の問題として—

ここでは、「畿内型横穴式石室」と主体部内容器埋納についてその背景ともなるべき問題についてふれることで一つのまとめとしたい。この論を進行させる前提ともなった先学の説にも十分にふれておく必要があるだろう。以下に簡単ではあるが学史を整理してみたい。

a : 学史の整理

「死」というものの認知とそれに伴う儀礼が存在すると考えた説として、小林行雄氏の「黄泉戸喫」¹⁸⁾が挙げられる。「記」「紀」神話にみられるイザナギとイザナミの話から横穴式石室にみられるミニチュア竈と関連させ、墓前炊飯と共同飲食が「黄泉戸喫」の実態であると推論し、その機能が生者と死者の厳重な区別にあるとした。また、白石太郎氏は「ことどわたし考」¹⁹⁾で同じ神話にみられる「ことどわたし」に着目し、横穴式石室の閉塞儀礼が「ことどわたし」であるという見解を示した。この中で注目されるのは、こういった儀礼は前期古墳にはみられず横穴式石室に代表されるように古墳時代後期になって大陸・半島から伝来した思想・儀礼であると考えたところにあるといえる。更にこれを受けて土生田純之氏²⁰⁾は主体部内容器埋納の開始を5世紀後半ととらえ、5世紀代以前から新羅、百濟、伽耶に共通する葬送習俗であるとし、その時期にみられるものは渡来人であると考えられている。それに加えて、柳沢一男氏は「古墳の変質」²¹⁾にお

いて6世紀前半に確立する「畿内型横穴式石室」の出現とそれに伴う葬送儀礼の影響があると指摘している。

以上の学説は何れも横穴式石室や出土遺物からの分析に基づくものであるが、一方では田中良之・村上久和氏による「墓室内飲食物供献と死の認定」²⁵においては出土人骨からのアプローチが試みられている。両氏の説によると、5世紀後半以降の被葬者は生物学的な死を迎えた後、幾年か後に何らかの儀礼を受けているとし、前段階とは異なる葬送儀礼が行われているとした。更に考察を加え、5世紀後半代以降に古墳に葬られる人々の親族関係が兄弟を基本とする原理から、父子及び両親と子というような父系の血統に基づく原理への変化がみられる、つまり、同世代原理から通世代原理への変化がみられそれに伴い葬送儀礼も変化したのではないかという見解を出している。

田中良之・村上久和氏の見解は非常に興味深いものであるが、人骨が良好に遺存していることが第一条件となり、また、「瓜状炭化物」（ここでは容器としての瓢箪等を想定されている）等のように遺存状態如何によっては検出され得ないものによって墓室内飲食物供献が行われているという説に関しては、従来の資料を用いた研究においては一般化し得ない点もある。でここでは須恵器・土師器を中心とする容器を取り扱っていることから重要な視点として用いることは困難である。

一方、小林行雄氏に始まり柳沢一男氏に到る学史の展開の中からは横穴式石室の導入とそれに伴う葬送儀礼の変質という基本的な文脈を読みとることが出来る。つまり、柳沢一男氏の説くところの「畿内型横穴式石室」とそれに伴う葬送儀礼を一つの軸として各地域を概観し、地域毎にそういった新たな葬送儀礼形態がどの様に受容されていったのかについて検討することが必要となっているのである。

b：事例の検討

ここでは葬送儀礼・習俗の問題に集中するために木棺直葬墳に与えた影響として、「畿内型横穴式石室」に伴う葬送儀礼である主体部内容器埋納がどの様に非横穴式石室に導入されているかについて、滋賀県の事例をまず挙げて、時期、地域の2点を中心にふれてみたい。

滋賀県下では横穴式石室の導入は現時点ではTK47段階併行期に相当する大通寺16号墳や穴太剣込16号墳がそれにあたとされている。つまり、畿内型横穴式石室の出現以前の横穴式石室がみられない点から比較の対象とするには適当ではないと判断したために、横穴式石室を導入しない地域に「主体部内容器埋納」という風習がどの様に広がっていったのかを問題とした。以上のような目的意識の下に若干の資料集成を試みた。その内容については基本的には予測し得たものもあったのであるがここに主体部内容器埋納に問題を集中し、「畿内型横穴式石室」が木棺直葬に与えた影響ということで論を進めたい。

未だ全時期を通観し得るほどの資料はないものの、滋賀県下の資料の集成から横穴式石室導入以前の段階においては須恵器・土師器からなる食器などの所謂容器の埋葬主体部内への埋納は基本的にはみられないといえ、この好例が守山市服部遺跡例であるといえる。この例については27基の古墳の内1基も埋葬主体部が確認されていないのであるが、それにもまして多くの古墳の周

溝からまとまった供献を示すものが出土しており、5世紀末から6世紀初頭にかけての古墳祭祀の様相について如実に表すものであるといえるだろう。

滋賀県下では大津市大通寺古墳群や穴太飼込古墳群でTK47型式段階から横穴式石室の導入が行われていると考えられるが、一般的な墓制として各地域で定着を見せるのは少なくともMT15型式以降、多くはTK10以降である。現時点で、MT15型式に相当する資料が欠落しておりその点での問題はありますが、少なくとも、TK10型式の段階になると木棺直葬墳においても埋葬主体部内に須恵器・土師器からなる容器の埋納が一般化している傾向がみられる。一方で前段階に守山市服部遺跡でみられたような周溝内供献は見られず高田館2号墳周溝にみられるように須恵器甕の供献が知られるのみである。

地域の中での横穴式石室の導入との関係を見ると、前述したようにTK47型式の段階においては現時点でしられているのは大津北郊のみというように地域的にもかなり限られており墓制として地域的広がりを見せるものではない。一方、MT15型式以降増加傾向を見せ、TK10型式にはほぼ一般的な墓制として定着するといえる。田中勝弘氏はこの状況の把握から各地域の首長級の墳墓に横穴式石室が導入され、それを契機に当該地域内へとその墓制が広がっていくといった論を展開させておられるが、滋賀県下の木棺直葬墳における主体部内容器副葬の展開もほぼ同一のモデルで捉えることが出来るのではないだろうか。

7世紀以降についてはまた、新たな墓制の展開がみられると考えられ、ここでとらえようとするような横穴式石室との関係で語られるものではないことから、それについては稿を改めてふれることとしたい。

それはさておき、滋賀県下での様相が比較的明きらかとなったことから他地域との比較を試みたい。

さきに主体部内容器埋納の事例として、北部九州、河内での事例を挙げた。北部九州においては5世紀代には少なくとも横穴式石室が導入されているのであるが、必ずしも主体部内容器副葬は実践されていない。大型古墳を除いて徐々に主体部内容器埋納を行う事例は増加しているものの、一般的な習俗であるとはいえない状況を示している。横穴式石室主体部内容器埋納の見られる5世紀後半代の河内の事例においても九州、渡来人との関連が指摘されており、一般的墓制として語られるレベルのものではないことは明きらかである。これらの地域において横穴式石室の主体部内容器埋納が一般化してくるのはMT15型式頃からであるという。前述したように柳沢一男氏の指摘するような「畿内型横穴式石室」とそれに伴う葬送儀礼の導入が、特に九州では前段階との比較から顕著にみられるといえるのである。

以上のように主体部内容器埋納が当該期の先進地域ともいえる2地域で確立するのはMT15型式頃であるとしてできるが、その他の地域での非横穴式石室における主体部内容器副葬を伴う葬送儀礼はどの様に受容されているのかについてふれてみたい。

前述したように滋賀県下ではTK10型式頃には少なくとも木棺直葬墳主体部内容器埋納の習俗が定着化を見せるといえる。また、これらは何れも一墳丘一埋葬であることもつけ加えておきたい。南山城地域においては、事例は必ずしも多くないもののTK10前後の前方後円墳である

長池古墳は木棺直葬であり主体部内容器埋納を行っているものとして注目される。これ以外にも6世紀中葉以降の木棺直葬を埋葬主体部とする小古墳で主体部内容器埋納がみられる。一方、丹後地方をはじめとする地域においては必ずしも近江や南山城でみられたような木棺直葬墳への主体部内容器埋納は見られず、独特の様相があるといえる。加えて、一墳丘複数埋葬を行っている点も指摘できる。つまり、近江や南山城でみられる木棺直葬墳における主体部内容器埋納については、畿内系横穴式石室に伴う葬送儀礼が導入された可能性を指摘することが出来るだろう。

また、対置すべき資料として丹後地域の事例を挙げたが、これらの木棺直葬墳に見られる須恵器・土師器などの容器のあり方は近江や南山城での事例と様相を異にしているといえる。つまり、地域によっては畿内型横穴式石室の導入がみられるものの、その周辺には2次的な動きとしては習俗レベルまで波及しないと理解してよい状況がみられるともいえるのである。つまり、丹後地域においては極めて特殊な動きとして横穴式石室墳をとらえることが出来るのである。

これら木棺直葬墳における「主体部内容器埋納」という習俗の抽出から、畿内型横穴式石室の波及の地域における在り方を示唆しているのかもしれない。

(2) 木棺直葬墳に見る「一墳丘一埋葬」と「一墳丘複数埋葬」の問題

一横穴式石室における追葬との関係について一

先にふれたように、畿内系横穴式石室に伴うと考えられる葬送儀礼の一つとしての主体部内容器埋納については、木棺直葬墳においても大いに関連の見られるところであるという指摘が出来そうである。加えて、若干の資料の検討から派生する問題が生じていることについてもふれておきたい。

6世紀前半代以降の主体部内容器埋納が顕著にみられる段階にあって、木棺直葬墳においてもそういった葬送儀礼が実践されているところと、そうでないところが見られる傾向がある。厳密に資料を集成した上の結果ではないが丹後地方などではMT15型式以降一墳丘複数埋葬が顕著にみられるようであり、主体部内容器埋納も必ずしも実践されているわけではない。滋賀県の事例で7世紀初頭の短期の様相しかうかがわれないものであるが蒲生町飯塚古墳群、日野町小御門古墳群においては一墳複数埋葬で、主体部内容器埋納も実践されていない。しかし、長期間にわたる造墓で様相が明らかな今津町妙見山・王塚古墳群では少なくともTK10型式以降は一墳丘複数埋葬から一墳丘一埋葬へと変化しており、主体部内容器埋納も行われている。また、南山城の城陽市芝山古墳群においても一墳丘一埋葬であり、主体部内容器埋納が行われている。

以上のようにみられた木棺直葬墳にみられる一墳丘複数埋葬という現象については地域偏差が存在することと、それに同調するかのよう⁵⁸に主体部内容器埋納の有無が見られるということが明らかとなっている。森岡秀人氏は一墳丘複数埋葬という状況が横穴式石室の利用方法に影響を受けたものではないかとされておられる。つまり、木棺直葬墳における一墳丘複数埋葬は横穴式石室の埋葬（追葬）原理を援用したものであると考えられている。しかし、具体的には丹後、丹波、大和、近江で見られるように一墳丘複数埋葬をとる木棺直葬墳には必ずしも主体部内容器埋納はみられない。また、近江、南山城などで見られるように一墳丘一埋葬をとる木棺直葬墳には主体部内容器埋納が見られる。この現象をどの様に理解すればよいのだろうか。何れも横穴式石

室墳の属性とも考えられるものを、それぞれの墓制に導入していることとなる。しかしここでは一墳丘一埋葬と一墳丘複数埋葬の背後にあるのは地域毎にみられる造墓に関する規制（あくまでも地域毎での規制）の発現形態であり、主体部内容器埋納こそが習俗レベルにまで及んだ畿内型横穴式石室墳における葬送墓制の影響であるといえないだろうか。

(3) 今後の課題

小稿では畿内型横穴式石室を主軸において非横穴式石室墳としての木棺直葬墳における習俗の変質過程をトレースしようという視点に基づいて若干の集成を試みた。その結果として6世紀代の近江や南山城地域においては、非横穴式石室墳にも「畿内型横穴式石室」の習俗レベルにおける属性の一つとしての「主体部内容器埋納」が実践されているという状況が把握された一方で、丹後地域では必ずしも「主体部内容器埋納」が実践されていない状況があることを理解することが出来た。これは地域における「畿内型横穴式石室」の受容形態の一端を示している可能性があることを指摘しておきたい。

また、一墳丘における埋葬の規制については小稿では必ずしも明確な解答を得ることは出来なかったが、地域毎の造墓規制があるのではないかと想定するに留め、今後の課題として更なる考察は稿を改めることとしたい。

加えて、今後は横穴式石室墳における「主体部内容器埋納」そのものが他の地域にどの様に及んでいるのかという点についてもふれてみたい。

以上、筆者の不勉強から全体的な理解としてはさしたる進歩は見られなかったようである。ただ、この様な発信源の比較的明確な「主体部内容器埋納」という習俗の問題を如何に取り扱うのか、また、地域的な遍在性をどの様に理解するのかという視点の元の基礎的な作業を行う前段階であると理解して頂き、今後の検討に向けて諸兄姉の叱正を賜りたい。

最後に、小稿をなすにあたって多くの方々の御指導・御教示・御助力を得た。御芳名を記し謝意を表します。

池田裕英・葛原秀雄・田中明・田中勝弘・広瀬和雄・細川修平・水谷香代子・山本孝行・横田洋三（敬称略・五十音順）

註

(1) 畿内型横穴式石室の定義などについては土生田純之氏の理解に準拠する。石室そのものの形態などについては概ね7つの特徴が見いだされるとするが、小稿で問題とするのはそういった点ではなく、「畿内型横穴式石室」の更なる属性習俗としての「主体部内容器埋納」にある。

（土生田純之「畿内型横穴式石室の成立と伝播」『大和王権と交流の諸相』名著出版 1994年）

(2) 大橋信弥『服部遺跡発掘調査報告書V』（滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・湖滋賀県文化財保護協会 1984年）

(3) 直木孝次郎ほか「滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳群調査報告」『大阪市立大学文学部歴史学教室紀要 第1冊』（大阪市立大学文学部歴史学教室 1953年）

(4) 葛原秀雄『今津町文化財調査報告書』第3集（今津町教育委員会 1984年）

- 畑中英二『日置前遺跡 一般国道161号湖北バイパス工事関連今津町内発掘調査報告書』
 (滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1995年)
- (5) 横田洋三『妙見山遺跡(妙見山古墳群) 一般国道161号湖北バイパス工事関連今津町内発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1991年)
- (6) 兼康保明『高田館遺跡 一般国道161号湖北バイパス工事関連発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会・財滋賀県文化財保護協会 1991年)
- (7) 本田修平『彦根市埋蔵文化財調査報告第9集 萬籠北遺跡』(彦根市教育委員会 1985年)
- (8) 水野正好『蒲生郡日野町小御門古墳群調査概要』(滋賀県教育委員会 1966年)
- (9) 水野正好「滋賀県蒲生郡蒲生町・飯塚古墳群発掘調査概要」(『滋賀県文化財研究所月報1』滋賀文化財研究所 1968年)
- (10) 重藤輝行「九州の朝鮮半島系墓制—初期横穴式石室と主体部内に土器を副葬する古墳の展開を中心として—」(『第34回 埋蔵文化財研究集会 古墳時代における朝鮮系文物の伝播』埋蔵文化財研究会・関西世話人会 1993年)
- (11) 柳沢一男「古墳の変質」(『古代を考える 古墳』吉川弘文館 1989年)
- (12) 森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜」(『古代学研究』111号 1986年)
- (13) 土生田純之「横穴式石室からみた5・6世紀の日本」(『日本横穴式石室の系譜』学生社 1991年)
- (14) 平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」(『京都考古』第14号 京都考古刊行会 1975年)
- (15) 小池 寛「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概要』第25冊 財京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987年)
- (16) 小池 寛「南山城地域の後期古墳の様相—城陽市長池古墳を中心として—」(『京都府埋蔵文化財情報』第40号 財京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年)
- (17) 石崎善久「須恵器出土の木棺直葬墳」(『京都府埋蔵文化財論集 第2集』財京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991年)
- (18) 小林行雄「黄泉戸喫」(『考古学集刊』二 1949年)
- (19) 白石太一郎「ことどわたし考」(『橿原考古学研究所論集 創立35周年記念』吉川弘文館 1975年)
- (20) 土生田純之「古墳出土の須恵器(一)」(『末永先生米寿記念献呈論文集 乾』吉川弘文館 1985年)
- (21) 前掲 註(1)
- (22) 田中良之・村上久和「墓室内飲食物供献と死の認定」(『九州文化史研究紀要』九州大学文学部九州文化史研究施設 1994年)
- (23) その段階に相当する木棺直葬墳の調査例は殆ど見られないのであるが、前述したような南山城など幾つかの地域で主体部内容器副葬が見られるものである。
- (24) この点については資料の増加に伴って様相が変わる可能性がある。また、6世紀代の横穴式石室を埋葬主体部とする栗東町和田古墳群においては墳丘周辺で須恵器・土師器からなる様々

な供献が行われている。

佐伯英樹「墓前祭祀行為と思われる供献遺物の一例―栗東町和田古墳群―」（『滋賀考古』第12号 滋賀考古学研究会 1994年）

②⑤ 田中勝弘「近江における横穴式石室の受容と展開」（『紀要』滋賀県立安土城考古博物館 1993年）

②⑥ 森岡秀人「群集墳の形成」（『古代を考える 古墳』吉川弘文館 1991年）

編集後記

昨夏は、暑い暑い日々が続きに続き、琵琶湖の水位は史上最低値を更新し続けました。その結果、湖岸のここかしこでは普段は日にすることの出来ない湖底遺跡の一面が姿を現わすことになりました。そして、明けて1月17日午前5時46分の悪夢の始まり。大自然の営為の前で、人間の無力を感じ続けた一年でした。被災者の方々には、衷心よりお見舞い申し上げます。さて、本号も多くの論考を掲載することが出来ました。つきましては、多くの方々からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。

平成7年3月

紀要 第8号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel (0775) 48-9780・9781

印刷・製本 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20
Tel (0775) 23-2580 Fax (0775) 24-6668